

並立の予測

—予測の読みの一側面—

石黒 圭

【キーワード】 連文型 並列 継起 累加 代替

1. 本稿の目的

寺村(1987)は、日本人の学部生 43 名を対象に、「その先生は」、「その先生は私に」、「その先生は私に国へ」、「その先生は私に国へ帰ったら」という要素を順に提示し、その後どんな要素が来て文が完成するか予測させる、という実験をおこなった^(註1)。その結果、日本語母語話者は驚くほどの正確さで先を予測していることがわかったという。この寺村(1987)の研究は、単に母語話者の予測能力の高さを示しているだけではなく、母語話者の頭の中に母語の文型に関する知識がすでにあつて、聴き取りや読みとりの際に、それを援用しながら理解しているということを示したところにその価値がある。庵(1999)は、「文文法は時間の制約と独立に研究してもよいが、テキスト言語学においてはそれだけでは不十分で、極めて短時間で言語処理が可能であるのはなぜかという問いに答える必要がある」と述べ、その点に関する示唆的な研究として、この寺村(1987)の研究を取り上げている。

筆者は、母語話者の頭の中に文型に関する知識があり、母語話者がそれを援用して実際の文章理解を短時間でおこなっているとすれば、それと同じようなことが連文でも起こっていると考え、「確かに、おまえにも正しいところがあるのは認めるよ。」と言われれば、次に反対のことが来そうな予感がするし、「今まで明るく話していた裕子が急に涙をぼろぼろとこぼし始めた。」という文章を読むと、その理由を知りたくて、次を読み進む。「そのとき、道路を急に白いものが横切ったんだ。」という話を聞けば、思わず「えっ、それは何だったの？」と反問してしまう。こうして見ると、日本語らしい自然な型は、一文の中にだけでなく、連文の中にもあるように思われる。これを筆者は連文型と名づけた。この連文型があることによって、後続文の予測も可能になるし、また、短時間での理解が可能になると考えるのである。

石黒(1996)は、一文の中の予測であった寺村(1987)の枠組みを広げ、連文の予測のしくみを明らかにすることを目指し、読み手が言語表現に基づいて予測する

枠組みを、当該文^(註2)と後続文^(註3)の接続関係によって、①理由、②句の説明、③格成分の説明、④結果、⑤逆接、⑥並立の六つに分けて論じたものである。そのうち、①理由については石黒(1998a)で、⑤逆接については石黒(1998b)ですすでに取り上げた。今回は、⑥並立を取り上げようと思う。

この⑥並立を取り上げる理由は、すでに挙げた六つの関係の中で、連文型の存在を明らかにするのもっともすぐれたものだからである。一般に予測は指標を形態だけに頼ることは難しく^(註4)、また予測である以上、大なり小なり外れるものであるが、この並立の予測は形態だけで予測が可能になる場合も多く、またその予測もかなり正確である。そのため、型として提示しやすい利点がある。実際に並立の連文型がどのような形態的指標によって支えられているかを以下で見ていきたい。

2. 調査の対象および方法

本稿での予測は常に文を単位にして考える。用例の中で、当該文には下線を、その文の中で特に予測を生み出す要因となっている要素には二重下線を付し、当該文を理解した結果、予測できた後続文には破線を付すことにする。予測には、当該文だけでなく、当該文までの文脈も影響を与えているので、そのような文脈をあらわす当該文の直前の先行文^(註5)を何文か明示したり、先行文が長い場合はそれまでの文脈を要約して { } に入れて提示したりする。

実際の作業手順は以下の通りである(対象とした資料は稿末を参照のこと)。

- ① 作品の冒頭の1文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ② 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

↓

- ①' 作品の冒頭の1文(=先行文)の内容は既に頭に入っている。
- ②' 冒頭文の次の文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ③' 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

↓

(以下同様の操作を繰り返す)

↓

- ①ⁿ 作品のn-1番目の文(=先行文)までの内容は既に頭に入っている。
- ②ⁿ n番目の文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ③ⁿ 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

すべての対象資料で、作品の結末までこの作業を1文ずつ順に繰り返す。以降の用例は、その作業の結果得られたものを整理、分類したものである。

3. 調査の結果

並立とは、何らかの意味で同一のカテゴリーに属する類似のものを、対等な関

係で複数列举したものである。本稿ではそれを並列、継起、累加、代替の四つに分類した。

3.1. 並列

並列は、並立の中でも典型的といってよいものである。同一のカテゴリーに属する複数の文が対等に並んだものであり、条件的、時間的、空間的關係を結ぶことはない。表現の価値としても基本的に等比重なので順序の入れ替えは自由に行える。

また、特に「第一に」「第二に」などの順序のマーカがついたものの場合、いくつかの段落をまたいで大きく括る、大きい接続にもなうことができるため、せまい意味での連文論の枠組みを越えるものでもある。

3.1.1. 順序のマーカ

並列を典型的に表すマーカは、順序のマーカである。実際の文章の中で列挙する内容を箇条書きを使わずに書くとしたら、列挙する一つ一つの項目に番号を振って、それが箇条書きであることを表すことが、読み手に箇条書きであることをわかってもらえるもっとも確実な方法である。その番号に当たるのが順序のマーカである。

- ・「第一」のグループ：「第一に」「第一は」「第一の～は」「まず」「はじめに」「最初に」「一つ目に」「一番目に」「～の一つは」など
- ・「第二」のグループ：「第二に」「第二は」「第二の～は」「次に」「次いで」「それから」「それに」「二つ目に」「二番目に」など
- ・「第三」のグループ：「第三に」「第三は」「第三の～は」「さらに」「それから」「それに」「三つ目に」「三番目に」など

「第四」以降は「第三」に準じて考えればよい。

そして、このグループの特徴はそれ以上並列の予測を許さない、「最後」のグループがあるということである。

- ・「最後」のグループ：「最後に」「最後は」「最後の～は」「終わりに」「おしまいに」「そして」「もう一つは」「もう一つの～は」など

この「最後」のグループについては若干の説明が必要だろう。以下の(1)、(2)がそれに当たる。

- (1) {旧来の新型兵器は構造や性能、数量や配備状況は隠されてきたが、核兵器が出現してからは新型兵器の情報はむしろ公然化されるようになった理由や原因をめぐって。} その理由の一つは、核爆発の威力と影響範囲が余りにも大きくかつ効果が激烈なため、大国といえども秘密裡に兵器実験を行うことが不可能になったことである。 {中略} もう一つの原因は、少くともごく最近まで、核兵器に核戦争の抑止機能を持たせようとしてきた

ため、すなわち相手をそれによって畏怖させる目的のため、かなりの程度まで自国が開発した核兵器を他国に誇示すること必要であった。 (世 882-883 頁)

(2) 公共事業は自民党の集票を支える最大の基盤だと言えらる。その理由は、第一にその金額が極めて巨額だからである。第二にはそれが農業では食えなくなった農民を村に足止めする効果を持ったからである。そして第三に、土建業を中心とする関連企業から、「汚い」カネも含めて選挙資金を仰げるばかりか、それら企業の社員たちを選挙の時の運動員として使うことができるからである。 (世 916 頁)

(1) 「その理由の一つは」で並列を予告している。ただし、その後にくいつ理由を挙げるかは明示していない。「二つ目の理由は」「三つ目の理由は」と、次々に理由が並ぶことも考えられる。しかし、「もう一つの原因は」としたことによって、原因・理由は二つしかないことがわかる。つまり、ここで並列が終わるのである。

(2) も同様である。ここでは「そして」が最後を予告するマーカーになっている。「そして」はいくつかの要素を並列させた場合、最後の要素の前において、それが最後であるということを表すことができる。それは、何らかの意味で決定的なものを表せるという「そして」そのものの機能によっている。「そして」がなければ「第四」が次に来る可能性も十分考えられる。

3.1.2. 並列を統括する文

並列的接続には影の統括命題があるというのは寺村 (1984) で示されたテーゼである。この統括命題を表す文が列挙される文の前におかれていると、並列が予測できる。多くは順序を表すマーカーと併用されて使われるが、並列を統括する文には、以下の(3)の「三つ」のように数字が示されるのが普通なので、最後を表すマーカーがなくても、「第三」が来れば最後であることが自然にわかる。

(3) 現在の自民党の混乱を、例によって例の如きお家騒動と見るむきもあるかもしれない。私自身は、たとえお家騒動ではあっても、従来のもととは明確に違ったお家騒動であると見ている。理由は三つ考えられる。第一は、この党が首相の提起した増税問題の衝撃から立ち直れないでいるということである。〔中略〕しかし、今日の自民党危機の第二の特徴は、今回の総選挙の結果、自民党はもはやこれまでの意味での派閥連合政党ではなくなったという点である。〔中略〕今回の自民党危機の第三の特徴は、総裁公選がすでに自民党政治の日程表の中にしっかりと組み込まれているという点である。 (世 832-834 頁)

むろん、(4)のように順序を表すマーカーと併用されない場合もある。その場合は並列を統括する文だけが頼りになる。

(4)論壇に目をうつすと、幸いなことに、三大紙の論調ははっきりしている。崔大統領辞任にさいして、『朝日新聞』の論説は、漸進的な民主化を約束していた崔大統領が任務を果たさず中途退陣したことを「意外」とし、これが「三金氏の排除にみられるように、力を背景にした政治指導者の交代という印象はぬぐいがたい」と、やんわりと批判している。(八月一七日)、『毎日新聞』の論説は、「韓国の行方に憂慮を深める」と題して、金大中裁判にかんする伊東外相の立場を支持すると表明し、「全斗煥委員長の政治を、朴正熙体制の再演とする見方がある。……全委員長が今後とも同じ道を歩んだのでは、抑圧政治を繰り返し、悲劇的末路をたどることになる」と述べている。『読売新聞』の社説も、「韓国には、朴時代の『維新体制』よりも一層厳しい『新維新体制』ともいうべき強権政治が再来する」と述べ、「わが国政府筋にも、この事態を、韓国民は『安定』を望んでおり、やむを得ない選択、と受け流そうとする向きがある。だが民主的手続きを無視する強権政治で、真の安定が得られるだろうか」と指摘している。(世 859-860p)

3.1.3. 文末表現「かもしれない」

並列の予測を誘発するマーカーとして働くのは、圧倒的に順序のマーカーが多いが、他もマーカーも散見される。ここでは「かもしれない」について見る。「かもしれない」が並列の予測のマーカーとして働くときは、選択的に働く。

(5) {車を乗り回している金回りのいい学生にたいして} 五十代以上の成功者たちが、ひとまず眉をしかめるのは、多分、自分自身の青春が戦中戦後で、物資窮乏の時代であった名残りが、心のなかに潜んでいるからかもしれない。あるいはまた、自分自身は、朝夕の車の送迎を当然と考えながら、平社員の間際、用務員の間際、学生の間際では、車はぜいたくだという身分感覚が残っているからかもしれない。 (世 775 頁)

3.1.4. 係助詞「も」

ここで並列の予測を誘発するマーカーとして問題にするのは、係助詞「も」である。係助詞「も」は並列を表すときによく現れる助詞なので、並列を予測させたとしても不思議はないであろう。

(6) しかし全体的な自己崩壊のおそろしさは、責任をとるものがだれひとりとしていないままに、ゆったりと、もたれあいながら、退廃への道を歩んでいくところにある。かつて、日中戦争から太平洋戦争にはいるときもそうだった。そして方向は逆のようであったが、八・一五以後もそうだった。 (世 778 頁)

3.1.5. 積み重ね

同じ文末形式のものを並列で積み重ねていくと、最初は予測できなかった並列の関係でも、次も来るのではないかと読み手の側も次第に構えて読むようになることがある。レトリカルな表現にたいする予測である。

(7)しかし、私は、ときどき、大企業のトップの心中の索漠を考えることがある。五十代、六十代の彼ら。そのなかには、敗戦の前後、文字通り、飢餓に近い経験をしたものもあつたろう。サラリーマン重役ぐらいであれば、それが通常であつたろう。そして、学生時代であれば、敗戦後の動揺のなかで、マルクス主義も熱心に読んだらう。学生運動にも参加したたらう。そして、日本軍国主義体制や日本財閥の批判も、人なみにしたこともあつたらう。日本の明日について、若者らしいイメージも持ったたらう。(世776頁)

3.1.6. 並列呼応

ここで並列呼応と呼んでいる予測は、ひじょうにロジカルな予測である。AとBという二つの要素がまず並列の関係で先行文に現れる。そしてその後、Aに対応するA'という文が当該文で現れたとき、つぎにBに対応するB'という後続文がA'と並列の関係で現れるのではないかと考える予測である。

(8) 日本の交通状況は、高度経済成長期から現在にかけて大きく変化してきた。とくに、一九六〇年代の半ば頃からの変化が量的にも、質的にも著しい。国内輸送をとってみても、貨物輸送量は一九六五年には一八〇〇億トンキロ程度であつたのが、一九八〇年代の終わりには五〇〇〇億トンキロ近くにまで増えている。他方、旅客輸送も、一九六五年の三八〇〇億人キロから、一九八〇年の終わりには一兆人キロに近づく規模にまで拡大している。

その構成をみると、質的变化はドラマティックである。一九六五年には、貨物輸送のうち、その約三分の一が鉄道によるもので、自動車輸送は四分の一程度であつた。一九八七年には、鉄道輸送はわずか四・六%を占めるにすぎず、自動車輸送は五〇%を超える比率を示している。因みに、内航海運比率は、一九六五年、一九八七年ともに四五%前後の比率となつている。

旅客輸送についても、貨物輸送ほどではないが、大きな質的变化がみられる。一九六五年には、鉄道は、旅客輸送の七〇%近くを占めていて、自動車は三〇%程度であつた。一九八七年は、鉄道は四〇%以下になって、逆に、自動車が、六〇%となって、比率が完全に逆転してしまつている。

(世966-967頁)

3.2. 継起

継起とはある事態が起こり、それに引き続いて別の事態が起こることを表すことばである。時間関係を持つかどうかという点をのぞいて、ほぼ並列と並行する。しかし、この時間関係を持つかどうかが列挙との決定的な違いであり、論説文など場面を伴わない文章では時間関係を表す継起はほとんど現れず、それにたいして順序のマーカーで表されるような並列は小説ではあまり使われない。

3.2.1. 順序のマーカー

順序を表すマーカーは、小説ではあまり使われないと述べたが、より正確に言うと、使われるマーカーと使われないマーカーがほぼ決まっているようである。「第一に」「一つ目に」といったマーカーは小説のような場面描写を伴うマーカーはまず使われない。使われていたのは、今回の調査の範囲では「最初」「はじめ」だけであった。この二つは時間の経過を伴って使うことができるようである。

- (9) 最初、私の頭に一撃が加えられ眼が見えなくなった時、私は自分が斃れてはいないことを知った。それから、ひどく面倒なことになったと思ひ、腹立たしかった。 (何 19 頁)
- (10) 「上から順番に剥がそうや」予科兵学校の制服を着た屈強な上級生が、周囲の者に、日焼けした顔を向けるとそう言った。自分でまず、煉瓦塀の塊の端に手をかけて剥がしはじめた。二、三人が手伝った。はじめに現われたのは、煉瓦の表面に付着した頭髪の束であった。{中略}最後に出てきたのは、ひしゃげた鮎色の頭蓋骨で、それにも髪の毛が付着していた。 (何 336 頁)

3.2.2. 視点人物を表す対象

並列の予測を生み出す力が、並列を影で統括する文にあるならば、継起の予測を生み出す力は、継起を統括している視点人物の目と、そしてその視点人物が注視している対象であろう。

「次に何が起こるんだろう。」そうした期待を持って、視点人物が対象を見るきっかけになるのは、突然なにが起こったとき、特に突然何かが視界に飛び込んできたときである。このとき、「現れる」「来る」「出る」という単独の動詞の他に、「テ形+来る」や「連用形+出る/出す」などの複合動詞が継起の予測を生み出す形態的指標になる。

- (11) このとき、竹藪から、額に大粒の汗をかいた男が飛び出してきた。男は息をきらせながら、周囲を見渡すと、「村田邦子はおりませんかあ」と、叫んだ。 (何 319 頁)

- (12) {戸板に載せられた怪我人が家に運ばれてきた場面で} 怪我人は頭に繻帯を分厚く巻かれ、腹の上に掛けられた薄い布団の下から、脚絆をつけ、

地下足袋をはいた足を出していた。思いがけない川向うの様子に、阿紀は格子窓から離れられなくなってしまった。蓋の開いたランドセルが傍に放り出されていた。土間の中から中年の女が出て来た。毎日その川原で米を磨ぎ、衣類を濯いでいる女だった。甲高い声をあげてその怪我人にしがみつくと忽ち両腕を宙に突き上げ、なにか喚きながら、少し離れた隣家に走った。 (何 225 頁)

こうした予測には(11)のように見ている先に注意が向いている場合と、見ている先だけではなく、(12)の「思いがけない川向うの様子に、阿紀は格子窓から離れられなくなってしまった。」に表れているように、見ている視点人物の目もまた意識されて、継起の予測が可能になっている場合とがある。

3.2.3. プロセスの途中を表す表現

当該の行動が何らかのプロセスの途中にあるとき、つまり、その行動が何らかの目的を達成するための準備段階の行動であるとき、継起の予測が可能になることがある。典型的には移動を表す動詞、それから、類型化はしにくい手順を表す動詞がこれに当てはまる。

(13) ほっとして阿紀は腕のバッグを揺り上げると、改札口を通過してホームに入った。空いているベンチに腰を下ろした。 (何 228 頁)

(14) {原子爆弾による傷害の治療法にキュウリの汁がいいらしいということになって} これは、キュウリを下ろし金ですりおろし、ガーゼで濾過して汁をとり、それにシッカロールを混ぜて練るのである。その練ったものをナイフでガーゼに平たくのばし、火傷の部分に貼りつけるのである。 (何 305 頁)

(14)は当然練るだけではだめで、貼るところまでいかなければ意味がない。料理などでもそうであるが、練るという動作はある手順の途中にある行動である。

また、(15)のように、何かの準備を始めているということが分かれば、当該の行動がプロセスの途中に位置する行動であることが分かるので、この継起の予測が可能になる。

(15) 子供を連れた中年の男と女が、ある日、荷車に一杯材木やトタン板を積んで、川のほとりにやって来た。彼らは山陰を選んで杭を打ち、はじめに小さな丸太小屋を建て、次に一軒のトタン屋根の家を建てた。 (何 226 頁)

「荷車に一杯材木やトタン板を積んで」という表現から、これから何かを始めようという準備の途中にあることが分かるのである。

3.2.4. 積み重ね

積み重ねについてはすでに並列のところでも扱った。複数の事態を積み重ねてい

くうちに次も似たようなパターンがくるような気がしてくる予測であった。一般に、並列のところでは表れるような論説文などの説明文の場合、文末表現は「だろう」や「かもしれない」の積み重ねによってこの予測は形成されるが、継起で扱うような小説などの描写文の場合、文末表現はル形、もしくはタ形の積み重ねでこの予測は生み出される。

- (16) 少女は席に着くと、手さげカバンの中から、教科書を出す。それから両手で抱きあげるように、空き缶を取り出す。そして、それを机の右端に置く。授業が終ると、手さげカバンの底に、両手でしまい、帰っていく。
(何 373p)

3.3. 累加

累加の予測は概略「だけではない」という文末表現で表されるグループと、「さえ」などの副助詞で表されるグループとに分かれる。累加は、並列と似ているが、添加される後続文のほうに表現としての比重がある。また並列のときのような段落をまたぐ大きい接続を担うこともなく、直後の後続文と関係を結ぶのが一般的である。

3.3.1. 限定を解除する文末表現

累加の予測を引き起こす文末表現は「だけではない」「にとどまらない」「にかぎらない」「ばかりでない」とそのバリエーションである。こうした形式に支えられる予測はまず外れることがない^(注6)。

- (17) 中小都市の復権は、大都市の外に求められるだけではありません。まさに大都市自体の内部で、より自立性をもった中小都市をつくることをも意味しています。 (世 802 頁)

「だけではない」は「だけ」と「ではない」の間に別の要素が入ることも多い。

- (18) ところで、公共事業が「政権再生産」システムになっているのは、こうした容易には動かし難い制度だけによるのではない。実は、システムの円滑な運転を保証しているものとして、与党政治家に対する信頼という要素を忘れるわけにはいかない。 (世 922 頁)

3.3.2. 副助詞「さえ」「すら」

副助詞「さえ」「すら」によっても累加の予測が引き起こされることがある。

- (19) {天皇の葬儀に関してイギリスの}保守党のアラン・アモス下院議員は、女王や首相が弔電を送ったことにさえ、「歴史に対して鈍感だ」と難詰した。当然、葬儀出席なぞ論外だということになる。 (世 964 頁)

3.4. 代替

否定文は文脈依存性を持つ(石黒 1999)。言い換えると、当該文が否定文である場合、先行文または後続文に依存することによって文としての存在意義を持つ。「ない」は「ある」との対立の中で初めて意味を持つが、その「ある」の根拠を先行文または後続文との関係に求めるからである。

否定文は、対になる肯定表現との関係によって、「ない」の有無に関わる表裏の対立、「～でないなら何なのか」という反問に媒介される交替の対立とに分かれるが、予測で問題になるのは後者である。この「～でないなら何なのか」という発想に基づく予測を代替と名づけ、以下で見ていくことにする。

3.4.1. 名詞化を表す文末表現

この代替の予測を引き起こす文末形式は典型的には「のではない」である。

(20) {文部省} 廃止説は、教育の国家統制をやめる、あるいは弱めるために文部省廃止を唱えたのではなかった。内務官僚が中心となってこれを主張したところにもあらわれているように、内務省に、たとえば教育局を新設し、教育行政を一般行政に従属させようとする意図から出た廃止説であった。 (世 910 頁)

こうした「のではない」については野田(1997)が詳しいが、(20)に即してごく簡単に説明すると、「ない」の前に「の」を介在させることによって、目的の部分、つまり「教育の国家統制をやめる、あるいは弱めるために」だけが否定のスコープに入るのである。その結果、「文部省廃止を唱えた」ことは事実だが、目的が違うということがわかるようになる。それなら「本当の目的は何なのか」という反問が読み手の中に湧き、その反問を後続文で解消しようという働きが予測につながるのである。

代替の予測を引き起こすのは「のではない」だけではない。文末を名詞化して否定すれば同じような働きが得られる。

(21) こんにち日本の選挙は、政策をえらぶという次元で行われるものではない。有権者個人や地元の利益、あるいは所属する組織の利益を、誰がどのくらいもたらしてくれるのかということに選択の基準を置く人々が多数にのぼる。 (世 913 頁)

(22) {IさんはKさんの実弟である。} YさんはIさんの義姉に当たるが、YさんがKさんの夫人というわけではない。Yさんは独身のひとである。Yさんの妹がIさんと結婚して義姉弟の関係になる。 (何 212 頁)

(23) もっとも彼が愛した日本は、われわれの前に展開する国土でもなければ、国民でもなかったし、まして日本の政治的現実でもなかった。彼によれば「日本国は精神にして、ソールなり」(「日本」一九〇一年)であった。日本の存在の根源といってもよいであろう。それは現実の日本というより、内村によって思われた日本、「理想」化された日本であった。

(世 874 頁)

(21)「ものではない」(22)「わけではない」といった明確な指標を持つもの
他、(23)のような名詞述語文であっても同じような効果を発揮する。

3.4.2. 係助詞「は」

いわゆる対比の係助詞「は」も、否定と呼応することで代替の予測を引き起こすことがある。(24)のように、本来格助詞「が」「を」であらわすべきところに係助詞「は」を用いたり、(25)のように、その他の格助詞に係助詞「は」を後接させたりしたとき、代替の予測のマーカ―として働く傾向がある。

(24) そういう学生である以上、私は「新」憲法などという言葉は、使わないようにしている。日本国憲法とか、いまの憲法とかいう。 (世 763 頁)

(25) 彼女は油揚げを少し井へ入れた。煮の鍋からはコンニャクやごぼうを井へ入れたが、帳場の方へは行かなかった。一旦森まで運んでおいて、何食わぬ顔で台所へ帰り、「の一姉さん等よー。わしやこの手すきの間に、ちよつと帰ってくるで」と一口声をかけておくと、急ぎ足に帰って行った。 (何 88 頁)

4. まとめ

以上の調査の結果をもとに、本稿では以下のことを主張する。

- ① 先行文脈を含めた当該文から、それと並立関係にある後続文を予測するとき、その並立関係は大きくは、並列、継起、累加、代替の四つに分けることができる。
- ② 並列の予測に働くものには、「第一に」などの順序のマーカ―、「理由は二つある。」などの並列を統括する文、文末表現「かもしれない」、係助詞「も」、同じ文末形式を持つ並列文の積み重ね、すでに表れた並列要素に呼応して並列が繰り返される並列呼応、の六つがある。
- ③ 継起の予測に働くものには、「はじめ」などの順序のマーカ―、視点人物注視する対象、プロセスの途中を表す表現、同じ文末形式を持つ継起文の積み重ね、の四つがある。
- ④ 累加の予測に働くものには、「だけではない」などの限定を解除する文末表現、副助詞「さえ」「すら」、の二つがある。
- ⑤ 代替の予測に働くものには、「のではない」などの名詞化を表す文末表現(名詞述語文を含む)、いわゆる対比を表す係助詞「は」、の二つがある。

注

- 1 もとの文は夏目漱石『こころ』の一節で、「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。」という文であ

る。

- 2 今読んで問題にしている文のこと。
- 3 当該文の後に続く文のこと。直後の文を指して使うことが多い。なお、寺村(1987)自身はそうした用語を使っていないが、その流れを汲む研究は、一文の中の後続要素を指して「後続文」という用語を使うことが多い。本稿における「後続文」とは用語の使い方が異なるので注意されたい。
- 4 ある形態があるとういう予測が起こりやすいという傾向まではいいやすいが、この形態があると必ず予測が起こるといえる形態はほとんどない。したがって、分類はどうしても形態に意味を加味したものにならざるを得ない。
- 5 当該文の前にある文のこと。「先行文→当該文→後続文」の順に並ぶ。
- 6 外れる場合もないわけではないが、その時は修辭色の強い表現になる。石黒(1996)を参照のこと。

資料

- (何) 大江健三郎編 日本ペンクラブ選 (1983) 『何とも知れない未来に』
集英社文庫 (原爆小説のアンソロジー。12名の作家の13作品を分析)
- (世) 『世界』主要論文選編集委員会編 (1995) 『『世界』主要論文選』
岩波書店 (『世界』掲載の論文のアンソロジー。うち16名の論文を分析)

参考文献

- (1) 庵功雄 (1999) 「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』 (一橋大学語学研究室) 36
- (2) 石黒圭 (1996) 「予測の読み —連文論への一試論—」『表現研究』64
- (3) ——— (1998a) 「理由の予測 —予測の読みの一側面—」『日本語教育』96
- (4) ——— (1998b) 「逆接の予測 —予測の読みの一側面—」『早稲田日本語研究』6
- (5) ——— (1999) 「否定表現の文脈依存性」『一橋大学留学生センター紀要』2
- (6) 寺村秀夫 (1984) 「並列的接続とその影の統括的命題 —モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3-8
- (7) ——— (1987) 「聞き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3
- (8) 野田春美(1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版

(いしぐろ けい／一橋大学留学生センター)